中等文法 口語

文部省

K250.8
2
1b

中等文法口語

文部省

1951.文部省寄贈

目錄

一　國語……一
二　音声と文字……五
三　文と文節……七
四　文節と單語……九
五　自立語で活用の有るもの……十二
六　自立語で活用の無いもの（一）……十四
七　自立語で活用の無いもの（二）……十七
八　附屬語で活用の有るもの……二十一
九　附屬語で活用の無いもの……二十二
十　品詞分類……二十三
十一　動詞の活用（一）……二十四
十二　動詞の活用（二）……二十八
十三　動詞の活用（三）……三十二
十四　形容詞の活用……三十八

十五　形容動詞の活用……四十二
十六　助動詞の接続と活用（一）……四十六
十七　助動詞の接続と活用（二）……五十六
十八　助動詞の接続と活用（三）……六十二
十九　助詞の種類と用法……七十
附　表
第一表　動詞活用表……八十六
第二表　形容詞活用表……八十八
第三表　形容動詞活用表……八十八
第四表　助動詞活用表……八十九
第五表　助動詞接続表……九十
第六表　助詞接続表……九十一

一　國　語

〔一〕　日本國民はすべて日本語を用いる。それを私どもは國語という。

〔二〕　自分の思っていること、感じていることを人に知らせようとする時、私どもはどうするか。自分の考えを傳えることは、身振りや信号・絵画などによってもできる。しかし、言葉ほど、複雑な内容を、正確に、しかも簡單に表わすことのできるものはないのである。身振りはからだの一部を用い、信号は音や色や光などを用いる。絵画は線や点や色を用いる。それでは、言葉は何を用いるのであろう。

〔三〕　言葉に用いる音声は、その場で消え去ってしまう。そこで、言葉を後までものこし、また、遠くまで傳えようとするために考え出されたのが、**文字**である。文字のおかげで、昔の祖先の言葉も今に傳わり、しかも、これを何べんも繰り返して読むこともできる。また、遠く離れている人にも、手紙などで、自分の考えを傳えることができるのである。

〔四〕　日本國民なら、だれでも國語を知っている。見ず知らずの人でも、國語で話し合うことができる。私どもは、この言葉を、一体、いつ、だれから習ったのであろう。幼い時から、周囲の人々の用いる言葉を聞いて、自然に覚えて來たのである。しかし、この自然に覚えた言葉そのまゝを用いたのでは、人に笑われたり、誤解されたり、通じなかったりすることがある。特に、よその土地

へ行った場合などがそうで、これは、土地土地で言葉が多少違うためである。そこで、日本全國どこにでも通ずるような言葉を知らなければならないことになる。こういう言葉を、私どもは主として学校で習って覚える。改まった場所で話をする時、あるいは違った土地の人に向かって話をする時には、この学校で習った言葉を用いる。文字で文章を書く時にも、普通、この言葉を用いる。なお、文字で書く時だけに用いる特別の言葉がある。これを**文語**という。これに対して、前に述べたような言葉は**口語**といわれる。

〔五〕 私どもが言葉を用いる時、相手が先生とか親とかいうような目上の人である場合には、相手を尊敬する氣持を言葉の上に表わす。即ち、**敬語**を用いる。相手に関することには尊敬を含めた語を、自分のことについては謙譲の意味を持った語を用い、その上、全体にていねいな言い方を用いるのである。

問題 1　次の言い方の違いを考えよ。

(甲)ありがとう。
(乙)ありがとうございました。

(甲)きみはどこへ行くのか。
(乙)あなたはどちらへお出かけでございますか。

問題 2　敬語の使い方について、いろ〳〵の場合を考えてみよ。

〔六〕 自分の考えを音声や文字で言い表わす時には、簡単に言い終ることもあるが、長々と言葉を続けることもある。ことに、講演や書き物では、ずいぶん長く言葉が続く。しかし、この場合、その間に少しも切れ目を置かずに続けるということはなく、ところどころ切っては、また続けるのである。少しまとまった考えを述べ終ったところでは、必ず言葉が切れる。話をする時はそこで息を切り、文字で書く時にはそこに「。」を附ける。こういう切れ目から切れ目までの一続きの言葉を**文**という。

〔七〕 自分の考えを言葉で言い表わす時には、その言葉は常に文の形をとっている。文には短いのも長いのもある。短い文は、一息に発音してしまうが、長い文では、中途で切ってちょっと息つぎをする。文字で書く時にはそこに「、」を附ける。

私の好きな学科は、國語と数学です。

更に、もっとこまかく句切って発音することがある。急いで來たり、激しい運動をした後などで物を言うと、とぎれとぎれになる。

私の　好きな　学科は、國語と　数学です。

しかし、これ以上句切って発音すると、実際の言葉としては、聞いておかしく感じられたり、わからなくなったりする。このような短い一句切りを**文節**という。文には、それ以上句切ることのできないものもある。これは一つの文節でできている文である。即ち、文は一つまたは二つ以上の文節からできている。

問題 3　次の文を文節に分けよ。

(一)あなたはどんな学科が好きですか。
(二)歴史です。

〔八〕 実際に物を言う場合には、文節以上に短く句切って発音することはない。ところで、このような文節を数多く並べてみると、共通した部分を持っているもののあることがわかる。

櫻が　咲く。
櫻を　植える。
見渡す　限り　櫻です。

この三つの文における「櫻が」「櫻を」「櫻です」という文節を比べてみると、「櫻」という部分が共通している。この共通している部分が、**單語**といわれるものである。また、これらの文節から「櫻」という言葉を除くと、あとに「が」「を」「です」というのが残る。これも單語である。「咲く」「植える」という文節は、これ以上分けて考えることができない。これらは一つの單語でできている文節である。即ち、文節は一つまたは二つ以上の單語からできている。

問題 4　次の文節を單語に分けよ。

(一) 孔子は　弟子に　道を　説く。
(二) 顔回は　孔子の　弟子です。
(三) 学を　好む。
(四) 國語の　研究に　従う。

〔九〕 文は文節からできており、文節は單語からできている。即ち、自分の記憶している單語を基として文節を作り、文節によって文を作り、それで、あるまとまった意味を表わすのである。しかし、單語をたゞ集めただけでは、意味のまとまった一つの文にはならない。文にするには、單語をあるきまりに従って並べなければならない。このきまりをはずれると、意味をなさなくなる。少なくとも、思うことを間違いなく傳えることができなくなるのである。このきまりを**文法**という。私どもは、知らず知らずのうちに、この文法に従って言葉を用いているのである。

問題 5　次の文節全部を用いて一つの文を作れ。

登った　きのう　山に　高い　私は

問題 6　次の單語全部を用いて文節にまとめ、一つの文を作れ。

役　馬　動物　立つ　です　に　は

〔一〇〕 口語と文語とは、その文法が違っている。もちろん一致するところも多いが、違ったところも少なくない。まず、口語の文法がどんなものであるか、それをこれから調べることにしよう。

二　音声と文字

〔一〕 言葉は、音声か文字で表わされる。

「日本人」という單語は、〔ニッポンジン〕と発音する。即ち「日本人」は、〔ニ〕という音声、〔ッ〕と促(つま)る音声、〔ポ〕という音声、〔ン〕とはねる音声、〔ジ〕という音声、〔ン〕という音声からできているのである。

〔ニッポンジン〕と発音する單語を文字で表わすと、「ニッポンジン」「にっぽんじん」「日本人」となる。このようにわが國では、國語を表わすのに、片仮名・平仮名・漢字の三種類の文字を用

いる。普通に文章を書く場合には、平仮名と漢字とをまぜて用いる。更にその中に片仮名を混用することもある。どういう場所に平仮名を用い、どういう場所に漢字を用いるか、また、どういう場合に片仮名を用いるかは、だいたいきまっている。

問題1　何か文章を一つ選び、それについて、一々文節に分け、どういう場合に、どういう文字が用いてあるかを調べてみよ。

〔二〕 **いろは歌**は、平安時代の末にできたもので、あらゆる違った仮名を集めて、意味のある歌に仕立てたものである。そこには四十七の仮名が集めてある。

問題2　いろは歌を書いてみよ。

問題3　いろは歌の中に、普通には用いない仮名がないか。

〔三〕 **五十音図**は、平安時代にできたもので、仮名を音声上の性質に基づいて排列したものである。縦のならびを行といい、横のならびを段という。一つの行、一つの段はそれ〴〵同じような性質を持った仮名が並べてある。五十音図は、國語を観察し、これを整理する上の基礎となるものである。

問題4　五十音図を書いてみよ。

問題5　濁音の仮名、半濁音の仮名、はねる音（撥音）の仮名を書いてみよ。拗音はどう書くか。

〔四〕 仮名は一字一字きまったよみ方を持っている。しかし、きまった意味は持っていない。これに対して漢字は、きまったよみ方のほかに、常に、ある意味を持っている。例えば「山」という字は、常に「やま」という意味を持っている。このように仮名と漢字とでは、その文字としての性質が違っているのである。

漢字のよみ方には、二通りの性質の違ったものがある。一つは**音**で、これは昔の支那語の発音に基づいたよみ方である。他の一つは訓で、これは日本で附けたよみ方であり、固有の日本語である。

〔五〕 仮名で言葉を書き表わす場合には、同じ音の仮名でさえあればどれを用いてもよいというのではなく、その書き方が言葉によってきまっている。これを**仮名遣**という。私どもは、いつも正しい書き方に従って書くようにしなければならない。仮名遣には、私どもが口語の文章を書く時に用いるもののほかに、文語の文章に用いられる特別の仮名遣がある。

三　文と文節

〔一〕 文には二文節以上から成り立っているものがある。その場合の、文節と文節との関係を考えてみると、いろ〳〵の種類がある。

〔二〕　風が　吹く。
　　花が　美しい。
　　私が　当番です。

これらの文は、いずれも二つの文節から成り立っている。これらについて、文節と文節との関係を考えてみると、「吹く」「美しい」「当番です」という文節は、どうするか、どんなであるか、何

であるかを述べたものであり、「風が」「花が」「私が」という文節は、何がそうするか、何がそうであるか、何が何であるかを示したものである。前者のような性質を持つ文節を主語という。即ち、文におけるこれら二つの文節相互の関係は、主語述語の関係にあるということができる。

〔三〕 文には、主語と述語との具わっているものもあるが、いずれか一方だけの場合も少なくない。ことに述語だけで主語の無いものが多い。

〔四〕 涼しい　風が　そよ〳〵と　吹く。

日本の　汽船が　太平洋を　渡る。

という文における「涼しい」「日本の」は、「風が」「汽船が」という文節にかゝって、どんな風か、どこの汽船かと、その意味を詳しく定めるものであり、「そよ〳〵と」「太平洋を」は、「吹く」「渡る」という文節にかゝって、どんなに吹くか、どこを渡るかと、その意味を詳しく定めるものである。このようなものを修飾語という。これに対して、「風が」「汽船が」「吹く」「渡る」を被修飾語という。即ち、これらの文節相互の関係は、修飾被修飾の関係にあるということができる。

「風が」は、「涼しい」との間では修飾被修飾の関係にあり、「吹く」との間では主語述語の関係にある。「吹く」は、「風が」に対しては述語であり、「そよ〳〵と」に対しては被修飾語である。

問題 1　普通の文において、主語と述語とはどちらが前に來るか。

問題 2　修飾語と被修飾語とでは、どちらが前に來るか。

四　文節と單語

〔一〕 (一) 朝日が　昇る。

(二) 朝　日が　昇る。

(一)の「朝日」も、(二)の「朝」「日」も、みな單語である。單語の中には、この「朝日」のように、二つの單語が合して一つの單語となったものがある。これを複合語という。

問題 1　次の文から複合語を取り出せ。

(一) 朝霧が　はれて、あちら　こちらで　すゞめの　鳴き声が　する。

(二) 旅立つ　人々と　見送る　人々とが、互に　別れを　惜しんで　いました。

(三) 近寄って　見ると、それは　隣り村の　幼友達で　あった。

〔二〕 岡本さんは　今　北海道に　出張中です。

伊藤さんも　たいへん　元氣です。

「岡本さん」「伊藤さん」は、一つの單語である。しかし、この單語は、「岡本」「伊藤」という單語に、「さん」という言葉が附いてできたものである。この「さん」のように、いつも單語の下に附いて、それで一つの單語となるものを接尾語という。

〔三〕 お寺に　参りました。

山の　中に　お堂が　あります。

「お寺」「お堂」は、それ〴〵一つの單語であるが、これは「寺」「堂」という單語に、「お」という言葉が附いてできたものである。この「お」のように、いつも單語の上に附いて、それで一つの單語となるものを**接頭語**という。

問題2　次の文から接頭語・接尾語の附いている單語を選び出し、どれが接頭語か、どれが接尾語かを言え。

(一) 私どもも、おとうさんに　連れられて、叔父さんの　洋行を　見送りに　行きました。

(二) 正男君、御苦労でした。

〔四〕「櫻が」「櫻を」「櫻です」という文節は、それ〴〵「櫻」という單語と、「が」「を」「です」という單語からできている。「櫻」という單語は、

梅、桃、櫻、そのほか　いろ〳〵の　花が　一時に　咲き出します。

などのように、それだけでも一つの文節になることができる。このような單語を**自立語**という。これに対して、「が」「を」「です」という單語は、それだけで文節になることはなく、常に自立語に附属して用いられる。このようなものを**附属語**という。單語には、この自立語と附属語との二種類がある。

問題3　次の文節について、自立語と附属語とを区別せよ。

(一) 汽車が　鉄橋を　渡ると、今まで　左手を　流れて　いた　川が、右手を　流れて、日の　光を　浴びて、まぶしいほど　光りました。

(二) 沙漠や、大陸の　奥地では、氣温の　変化は　実に　激しい。冬　寒く　夏　暑いと　いうだけ　では　なく、一日の　うちでも　日中は　はなはだしく　暑いのに、夜に　なると、たいへん　寒い。

文節には、自立語が一つは必ず含まれている。二つの單語からできている文節は、自立語に附属語が一つ附いたもの、三つ以上の單語からできている文節は、附属語が二つ以上附いたものである。

私　汽船　外國　行く

これらは、いずれも自立語である。しかし、このように自立語を並べただけでは文にはならない。自立語に適当に附属語を添えることによって、はじめて文になるのである。

問題4　右に挙げた自立語を基にして文を作れ。

〔五〕　單語は、常にきまった意味ときまった形とを持っているが、中には、單語の終りの部分の変化するものがある。

それでは　お祖に　舞いましょう。

でも、その　羽衣が　ないと、舞う　ことが　できません。

羽衣を　お返ししたら、あなたは　舞わずに　帰って　おしまいに　なるでしょう。

天人は、羽衣を　着て、静かに　舞う。

みんな　そろって　舞え。

「舞い」「舞う」「舞わ」「舞え」は同じ一つの單語である。しかし、それ〴〵終りの部分が違っている。このように、一つの單語でありながら、用い方に従って終りの部分の変化することを**活用**

という。

問題5　「舞う」は自立語か附属語か。

問題6　「舞う」に「ない」「ます」「ば」を附けて文節を作れ。

〔六〕　附属語にも活用の有るものがある。例えば「ます」は次のように用いる。

何の　おかまいも　できませんでした。

おみやげまで　いたゞきまして、ありがとう　ございます。

〔七〕　以上調べて來たことをまとめてみると、單語には、(一)自立語で活用の有るもの、(二)自立語で活用の無いもの、(三)附属語で活用の有るもの、(四)附属語で活用の無いものの四種類のあることが知られる。

五　自立語で活用の有るもの

濃い　青空には、春の　國から　生まれて　來たかと　思われる　白雲が、山の　ふところから　ぽっかり　顔を　出す。

柔らかな　日ざしが、窓　いっぱいに　降り注ぐ。縁先の　雪が、かすかな　音を　立てて崩れる。

風は　まだ　うら寒い。けれども、家々の　窓も　障子も、いっせいに　あけはなされて、どこからか、カナリヤの　さえずりが　ほがらかに　聞えて　來る。

〔一〕　右の文中、傍線を附けたものは、みな自立語であって活用の有るものである。これを用言という。

問題1　右の文中、傍線を附けたものに、はたして活用が有るかどうか、調べてみよ。

問題2　右の文中の用言を、例えば次のように、文の終りに用いて言い切りにしてみよ。

故郷を　思う。

この　石は　軽い。

日ざしが　柔らかだ。

右の問題2の例文によっても知られるように、用言はそれだけで述語となることができる。

問題3　「読む」「書く」「強い」「弱い」「きれいだ」「涼しい」「静かだ」「運ぶ」「さわやかだ」「見る」「苦しい」など、できるだけたくさんの用言を、その言い切りになる時の形の終りの音で比べてみて、これを分類せよ。

〔二〕　(一)　泳ぐ　立つ　居る　受ける　來る　緊張する

(二)　よい　廣い　多い　勇ましい　正しい

(三)　暖かだ　のどかだ　すなおだ　じょうぶだ　勇敢だ

(一)を動詞、(二)を形容詞、(三)を形容動詞という。

問題4　動詞・形容詞・形容動詞はそれ〴〵形が違うが、意味の上で、動詞と形容詞とはどう違うか。動詞と形容動詞とはどう違うか。

六　自立語で活用の無いもの（一）

きちんと　そろって　進んで　いた　列が、だん〳〵　乱れて　行った。ぼくは　先頭に　後れないように、いっしょけんめいに　水を　けった。しかし、潮流は　ます〳〵　急に　なるのか、いくら　手足に　力を　入れても、なか〳〵　進まない。

「しっかり　泳げ。そら、あの　砂浜が　到着点だ。」

船の　上から　先生の　声援が　聞える。

〔一〕　右の文中、傍線を附けたものは、みな自立語であって活用の無いものである。

〔二〕　右の語例中、「列」「砂浜」「声援」は、いずれも附属語「が」を伴なって主語となっている。これらのように、「が」を伴なって主語となる単語を体言という。「ぼく」「水」「手足」等の単語は、この例文では「が」を伴なってはいないけれども、

ぼくが　先頭だ。

水が　ぬるむ。

手足が　冷たい。

のように、「が」を伴なって主語となることができる。故に、「ぼく」「水」「手足」等も体言である。体言は、「が」のほかに「を」「に」「へ」等の附属語をとることができる。

問題　1　右の例文中、以上のほかに附属語「が」を伴なって主語となることのできるものはないか。

〔三〕　体言はまた名詞という。名詞には次のようないろ〳〵のものがある。

（一）　机　犬　梅　石炭　家　機械　心　勇氣　衛生　時間　忍耐

（二）　聖徳太子　野口英世　奈良　東京都　太平洋　富士山　信濃川　琵琶湖

法隆寺　万葉集

（三）　一つ　二　三人　四羽　五時　六倍　七番　八つ目　第九　幾つ　幾日　何度　何番目

（四）　私　あなた　これ　あっち　どこ

（一）は事物の名を表わすもの、（二）は人名・地名等を表わすものである。この（二）を特に固有名詞ということがある。

○この固有名詞に対して、（一）を普通名詞ということがある。

（三）は数を表わすか、または数によって順序を表わすものである。これを特に数詞ということがある。

（四）は事物の名を表わすものでもなければ、人名・地名等を表わすものでもない。伊藤という姓の者でも鈴木という姓の者でも、みな自分のことを指して「私」と言うことができるし、また、相手が伊藤でも鈴木でも、その人を指して「あなた」と言うことができる。このように、事物の名を言わず、事物を直接に指して言うものを、特に代名詞ということがある。

〔四〕　代名詞には、「私」「このかた」「どのかた」のように、人を指して用いるものと、「これ」「そこ」「どちら」のように、事物・場所・方角を指して言うものとがある。

問題 2　代名詞には次に挙げたもののほかに、どんなものがあるか。

自称	わたくし					
対称	あなた					
他称	近称	とのかた	これ		どちら	方角
	中称	そのかた		そこ		場所
	遠称	あのかた				
不定称		どのかた				
		人	事物	場所		

問題 3　人に関する代名詞は、目上の人に用いるものと友達などに用いるものとで、違うことが多い。どんなに違うか。

問題 4　次の文の空白の箇所に適当な代名詞を入れよ。

（一）あなたが　おいでに　なるのでしたら、□も　お伴しましょう。

（二）きみが　行くなら、□も　いっしょに　行って　みたい。

七　自立語で活用の無いもの（二）

〔五〕　前の章のはじめに挙げた例文中の、「きちんと」「だん〳〵」「しかし」「ます〳〵」「いくら」「なかなか」「しっかり」「そら」「あの」は、やはり自立語であって活用の無いものである。

問題 5　これらの語は、「が」を伴なって主語となることがあるか。また、「を」「に」「へ」等の、附属語をとることができるか。

〔六〕　「きちんと」「だん〳〵」「ます〳〵」「いくら」「なか〳〵」「しっかり」「あの」という文節は、それだけで下の語を修飾しているのであるが、「きちんと」のかゝって行くのは「そろって」という文節で、「きちんと」は「そろう」という用言を修飾している。これに対して、「あの」は、「砂浜が」という文節にかゝり、「砂浜」という体言を修飾している。このように、それだけで修飾語になる語のうちにも、用言を修飾するものと体言を修飾するものとがある。前者を**副詞**といい、後者を**連体詞**という。

問題 6　前の例文中の「だん〳〵」「ます〳〵」「いくら」「なか〳〵」「しっかり」は何を修飾しているか。

〔七〕　世間は　すっかり　失望した。
きょうは　少し　涼しい。
道は　ずいぶん　急だ。

右の「すっかり」「少し」「ずいぶん」は副詞である。このように、修飾する副詞と修飾される用言とが、引き続いて出て來ることもあるが、また、前の例文における「いくら」の場合のように、その間に他の語のはいることも少なくない。

小石が　ころ〳〵と　谷底に　ころがる。
やはり　こちらが　よい。

〔八〕　もっと　ゆっくり　歩け。
ずっと　はっきり　見える。

右の「ゆっくり」「はっきり」は、「歩け」「見える」を修飾するから、副詞である。また、「もっと」「ずっと」も、「もっと歩け」「ずっとよい」のように用いられて、やはり副詞である。その「もっと」「ずっと」が、こゝでは「ゆっくり」「はっきり」を修飾している。このように、ある種の副詞は、他の副詞を修飾することがある。

〔九〕　ずっと　前を　見よ。　　ずっと　昔の　話。
もっと　右の　方だ。　　もっと　向こうへ　寄れ。

右のように、ある種の副詞は、場合によって体言を修飾することがある。

〔一〇〕　**問題 7**　次の文の空白の箇所に、適当な言葉を入れよ。

（一）決して　告げ□。
（二）どうか　おいで□。
（三）まるで　雪の□。　　ちょうど　鳥の　飛ぶ□。
（四）多分　だめで□。　　まさか　しないで□。
さぞ　お困りで□。
（五）もし　だめで　あっ□、　たとい　失敗しよう□。

このように副詞のうちのあるものは、それを受ける語に特別の言い方を要求する。

問題 8　次の文を基にして、「今」「明日」「二つ」は副詞か体言かを考えよ。

（甲）今　來た　ところです。
（乙）今が　よい　時機だ。
（甲）明日　東京へ　参ります。
（乙）明日が　私どもの　学校の　創立記念日です。
（甲）みかんを　二つ　下さい。
（乙）一つより　二つが　よい。

問題 9　体言か、体言でないかを見分ける方法を言え。

〔一一〕　ある　夜の　ことで　あった。
どの　山へ　登ろうか。
太陽は　あらゆる　生命の　源泉で　ある。
小さな　すみれが　咲いて　いる。

右の「ある」「どの」「あらゆる」「小さな」は、いつも体言を修飾する。即ち、連体詞である。

問題 10　副詞はどういう場合に用いられるか。

問題 11　連体詞はどういう場合に用いられるか。

〔三〕　前の例文中の「しかし」「そら」は、主語にも述語にも修飾語にもならない語であり、これらとは違った特別のものである。しかも、「しかし」は前の言葉の意味を下の言葉へ続けて行くが、「そら」の方は、

（ちょっと　ペンを　取って　下さい。）　そら。

のように、それだけで一つの文をなすことが少なくない。前者のようなものを**接続詞**、後者のようなものを**感動詞**という。

〔三〕　道は　かなり　遠い。けれども　時間は　多く　かゝらない。
兄は　自轉車にも　乘れるし、また　自動車にも　乘れる。
藤原は　英語も　でき、その上　ドイツ語も　うまい。
奈良　及び　京都は、わが　國の　旧都で　ある。

右の「けれども」「また」「その上」「及び」は、いずれも接続詞である。

〔四〕　あ、そうだった。　　おい、網を　揚げるんだ。
おゝ、熱い。　　もし〳〵、佐藤さん。
はい、わかりました。　　えゝ、参りましょう。
いや、そんな　氣持は　ありません。
（あなたは　御存じですか。）　いゝえ。

右の「あ」「おい」「おゝ」「もし〳〵」「はい」「えゝ」「いや」「いゝえ」は、いずれも感動詞である。

問題 12　**接続詞**はどういう場合に用いられるか。

問題 13　**感動詞**はどういう場合に用いられるか。

問題 14　次の文から副詞・連体詞・接続詞・感動詞を抜き出せ。

お客が、庭に　植えて　ある　竹の　先に　笠が　かぶせて　あるのを　見て、しきりに　「やあ、不思議、不思議。」と　感心する。そこで、主人が　その　わけを　尋ねた。すると　お客は、「よくも　あんなに　高い　先まで　届くような　はしごが　あった　ものですね。」と　言った。

八　附属語で活用の有るもの

いくら　美しい　文字で　文を　書いても、うそ　いつわりの　心持を　書いたのでは、だれも　感心して　読まないように、どんなに　飾った　言葉で　話しても、まごころが　こもらなければ、少しも　聞く　人々を　感心させません。これと　反対に、りっぱな　心持が正しい　言葉で　書かれて　あれば、その　文を　読む　人々が、心から　感動するように、まごころを　正しい　言葉で　話せば、聞く　人たちは、喜んで　いつまでも　その　話に耳を　傾けます。

〔一〕　右の文中、傍線を附けたものは、他の語に附属する語で、しかも活用の有るものである。これを**助動詞**という。

問題　右の語例について、それがどんな種類の語に附いているか、整理してみよ。

〔二〕　助動詞は、右の例文でも知られるように、用言や他の助動詞に附いて、いろ〳〵の意味を加える。また、

これは　日本の　地図です。
この　地図は　日本のだ。
頂上は　もう　すぐです。

の「だ」「です」のように、主として体言・助詞、または副詞に附いて、その文節を述語とする働きを持つ助動詞もある。

九　附属語で活用の無いもの

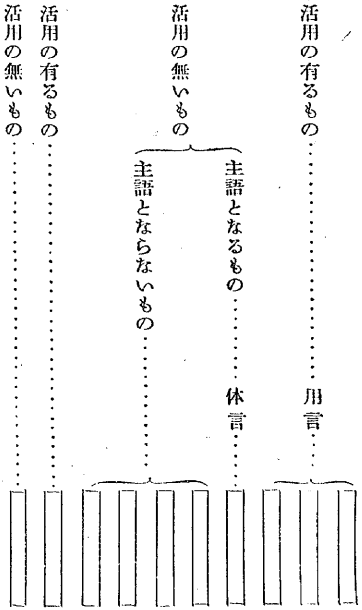
魚は　人間ほど　高い　音を　聞く　ことは　できないが、人間に　聞えないような　低い音を　聞く　ことが　できる。だから、めだかなどを　つかまえようと　思って、そっと　近寄っても、めだかの　方では　たちまち　聞きつけて　すぐ　逃げて　しまう。

〔一〕　右の文中、傍線を附けたものは、他の語に附属する語で、活用の無いものである。これを**助詞**という。

問題　右の語例について、それがどんな種類の語に附いているか、整理してみよ。

十　品詞分類

〔一〕　**問題**　次の表を完成せよ。



今まで調べて來たように、單語には、その文法上の性質が同じものもあれば、違ったものもある。この性質に基づいて、あらゆる單語を分類したものを**品詞**という。動詞・名詞などは品詞の名である。

十一　動詞の活用（一）

〔一〕「書く」という動詞は、打消の意味を加えて言えば「書かない」であり、ていねいの意味を添えて言えば「書きます」である。このように、動詞には用い方によっていろ〳〵形が変わる。即ち、活用が有る。

形の変わる部分を**活用語尾**といい、これに対して、変わらない部分を**語幹**という。

〔二〕動詞の活用について見ると、次の六つの場合がある。

（一）書かない　受けない
（二）書きます　受けます
（三）書く。　受ける。
（四）書く　時　受ける　時
（五）書けば　受ければ
（六）書け。　受けろ（受けよ）。

（一）の「書か」「受け」は、「ない」に連なる形である。これを**未然形**という。
（二）の「書き」「受け」は、「ます」に連なる形である。これを**連用形**という。
（三）の「書く」「受ける」は、言い切る時に用いる形である。これを**終止形**という。終止形は動詞の基本の形である。動詞を単語として取り出す時はこの形で言う。

（四）の「書く」「受ける」は、「時」などの体言に連なる形である。これを**連体形**という。
（五）の「書け」「受け」は、「ば」に連なる形である。これを**仮定形**という。
（六）の「書け」「受け」（受けよ）は、命令の意味で言い切る形である。これを**命令形**という。
以上の未然・連用・終止・連体・仮定・命令の各形を**活用形**という。

問題 1　「読む」「生きる」という動詞について、右に挙げた六つの場合があるかどうかを調べてみよ。

〔三〕右に挙げた「書く」「読む」の活用を表にまとめると、次のようになる。

基本の形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
書く	か（書）	―か	―き	―く	―く	―け	―け
読む	よ（読）	―ま	―み	―む	―む	―め	―め
おもな用法		ナイに連なる	マスに連なる	言い切る	トキに連なる	バに連なる	命令の意味で言い切る

このような活用を**四段活用**という。

問題 2　「咲く」「泳ぐ」「押す」「打つ」「死ぬ」「飛ぶ」「飲む」「乗る」の活用表を右にならって作れ。

問題 3　右に挙げた四段活用の動詞を五十音図に照らして、どの行に活用するかを調べてみよ。

○動詞は、その活用する行によって次のように言う。例えば、「書く」はカ行四段活用の動詞、「読む」はマ

行四段活用の動詞のようにである。

問題 4　「買う」「拾う」の活用表を作れ。

○これらの動詞はワ行とア行とにまたがって活用する。

〔四〕　「起きる」という動詞は次のように活用する。

弟は　まだ　起きない。

六時には　起きます。

毎朝　六時に　起きる。

起きる　時を　間違えるな。

五時に　起きれば　間に　合うだろう。

早く　起きろ(起きよ)。

問題 5　右にならって、「落ちる」を活用させてみよ。

問題 6　「起きる」と「落ちる」の活用を表に作れ。

基本の形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
起きる							
落ちる							

おもな用法	連なる	連なる	切る	連なる	連なる	で言い切る
	ナイに	マスに	言い	トキに	バに	命令の意味

この活用を見ると、活用語尾は五十音図のイの段の音と、それにる・れ・ろ(よ)の附いたものとでできている。このような活用を**上一段活用**という。

問題 7　次の動詞を活用させよ。

悔いる　生きる　過ぎる　煎(せん)じる　朽ちる　延びる　試みる　懲(こ)りる

問題 8　次の動詞を活用させよ。

居(い)る、着る　似る　干(ひ)る　見る

○これらの動詞は語幹と活用語尾との区別がつかない。

○上一段活用の動詞は、ア・カ・ガ・ザ・タ・ナ・ハ・バ・マ・ラの各行にある。

問題 9　「居(お)る」の活用を言え。

〔五〕　「考える」という動詞は次のように活用する。

まだ　何も　考えない。

私も　よく　考えます。

熱心に　考える。

しみ〻と　考える　時も　ある。

考えれば　できそうだ。

もっと　考えろ(考えよ)。

問題 10　右にならって、「分ける」という動詞を活用させてみよ。

問題 11　「考える」「分ける」の活用を表に作れ。

この活用を見ると、活用語尾は五十音図のエの段の音と、それに**る・れ・ろ(よ)**の附いたものとでできている。このような活用を**下一段活用**という。

問題 12　次の動詞を活用させよ。

越える　助ける　投げる　載せる　まぜる　捨てる　なでる　尋ねる　比べる　改める
流れる

問題 13　次の動詞を活用させよ。

得る　出る　寝る　経る

○これらの動詞は語幹と活用語尾との区別がつかない。

○下一段活用の動詞は、ア・カ・ガ・サ・ザ・タ・ダ・ナ・ハ・バ・マ・ラの各行にある。

問題 14　上一段活用と下一段活用とを比べてみて、似ている点と違っている点を言え。

十二　動詞の活用(二)

〔六〕「來る」という動詞は次のように活用する。

太郎は　こない。
次郎は　きます。
次郎は　きょう　くる。
くる　時は　三郎も　連れて　こい。
午後　くれば　よい。
いっしょに　こい。

問題 15　「來る」の活用を表に作れ。

○この動詞は語幹と活用語尾との区別がつかない。

これと同じ活用の動詞は、ほかには無い。この変化は、る・れ・いを別にして考えると、五十音図のカ行の三つの段にわたっている。これを**カ行変格活用**(カ変)という。

〔七〕「する」という動詞は次のように活用する。

あの　人は　少しも　仕事を　しない。
私は　何でも　します。
私も　お手傳いを　する。
質問を　する　時は　手を　挙げなさい。
鍛錬を　すれば　じょうぶに　なる。
早く　しろ。

また、この動詞は次のような言い方をすることもある。

(一)　質問　一つ　せず、すぐ　会得して　実行に　かゝる。
(二)　運動を　させる。　大事に　される。
(三)　早く　せよ。

(一)の「せず」の「ず」は、「ない」と同じく打消の意味を表わす助動詞で、例えば「泳がず」

「受けず」のように、動詞の未然形に附くものである。故に、この「ず」に連なる「せ」も未然形と認めることができる。

(二)の「させる」「される」は、助動詞「せる」「れる」を伴なった形である。

問題16　「取る」に「せる」「れる」を附けてみよ。

このように、「せる」「れる」は動詞の未然形に附くものである。故に、この「せる」「れる」に連なる「さ」を未然形と認めることができる。

(三)は命令する言い方である。故に、この形も命令形と認めることができる。

「する」の活用を表にまとめると、次のようになる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
する	せ さ	し	する	する	すれ	しろ せよ
おもな用法	ナイ・ヌ・セルに連なる	マスに連なる	言い切る	トキに連なる	バに連なる	命令の意味で言い切る

○この動詞は語幹と活用語尾との区別がつかない。

この活用は、る・れ・ろ(よ)を別にして考えると、その変化が五十音図のサ行の四つの段にわたっている。これを**サ行変格活用**(サ変)という。これに属する本来の動詞は「する」一語であるが、この「する」は、名詞などと合して多くの複合動詞を作る。

問題17　次の語を動詞にせよ。

(一)うわさ　暇(いとま)どい　手習い

(二)運動　命令　学問　感動　指導　練習

問題18　次の語を活用させよ。

重んずる　軽んずる　疎(うと)んずる

○これらは、もと〳〵「重み」「軽み」「疎み」という名詞と「する」とが合してできた複合動詞である。

○右の動詞は、「重んじる」「軽んじる」「疎んじる」と上一段にも活用する。

問題19　次の動詞を活用させよ。

罰する　達する　信ずる　禁ずる　論ずる　通ずる　命ずる

○これらは、「罰」「論」等の一字の漢字でできている漢語と「する」とが合してできた複合動詞である。

○右の動詞のうち、「信ずる」「通ずる」などは、「信じる」「通じる」などと上一段に活用することもある。

問題20　次の動詞を活用させよ。

愛する　議する　利する　熟する　託する　廃する　服する　訳する　略する

○これらも、「愛」「議」等の一字の漢字でできている漢語と「する」とが合してできた複合動詞である。

○これらは、「愛す」「議す」「利す」「熟す」等とサ行四段にも活用する。

問題21　次の語を動詞にせよ。

(一)略　訳●

(二)省略　飜訳

問題22　次の語は、これに「する」を附けて動詞にすることができるか。

博愛　哲学　文字　写眞　食物

十三　動詞の活用(三)

〔八〕　(一)静かに　本を　読もう。

(二)あすは　五時に　起きよう。

(三)來年　試驗を　受けよう。

(四)あす　來よう。

(五)静かに　勉強しよう。

右は「読む」「起きる」「受ける」「來る」「勉強する」の各動詞に意志の意味を加えた言い方である。

問題23　右の各動詞は何活用か。

(二)から(五)までは、「起き」「受け」「來(こ)」「勉強し」と「よう」との二つの部分に分けることができる。

問題24　「起き」「受け」「來(こ)」「勉強し」はどの活用形に属するか。

即ち、動詞の未然形に「よう」が附いて意志の意味が附け加えられるということができる。

(一)の「読もう」は、(二)から(五)までとは少し違っているが、(二)から(五)までの言い方と比べてみて、「読む」の意味を表わす部分と、意志の意味を附け加える部分との二つに分けることができよう。即ち「読も」と「う」とにである。「読も」という形は、「読む」の活用形には見えないが、上一・下一・サ変の場合に、未然形から「よう」に附くことを考え合わせれば、この「読も」を未然形に收めることができよう。このようにして、四段活用動詞の未然形は次のようになる。

読まない　書かない　立たない

読もう　書こう　立とう

〔九〕　かさを　さして　参りましょう。

かさを　さした　人が　通る。

早く　きて　下さい。

母から　手紙が　きた。

きたり　こなかったりです。

右の例でわかるように、動詞が「て」「た」または「たり」に連なる場合は、連用形から連なる。

問題25　「書く」「曇る」に「て」「た」または「たり」を附けてみよ。

手紙を　書□て　下さい。

手紙は　正雄が　書□た。

すっかり　暮□て　しまった。
晴れたり　曇□たりの　天氣です。

右のように、「て」「た」または「たり」に連なる場合、普通の連用形とは違った形から連なるものがある。これは**音便の形**といわれるものである。

問題 26　次の文の空白の箇所に適当な文字を入れよ。

陸上の　動物が　歩□たり、走□たり、飛□だり、または　這□たり　するように、魚は　一生　水の　中に　す□で、水の　中を　泳□で　います。

このように動詞の音便の形には、「い」になるもの（イ音便）、「ん」になるもの（撥音便）、つまる音になるもの（促音便）の三つの種類がある。また、場合によって、動詞を受ける「て」「た」「たり」が「で」「だ」「だり」となることがある。

問題 27　次の語に「て」「た」を附けてみよ。

（一）掃く　騒ぐ　出す　貸す　打つ　死ぬ　拾う　飛ぶ　生む　作る
（二）生きる　過ぎる　延びる　おりる　受ける　逃げる　迎える　調べる　來る　練習する

問題 28　音便の形のあるのは何活用の動詞か。どの行に活用する動詞か。

問題 29　イ音便になるのはどの行に活用する動詞か。また、撥音便・促音便になるのはどの行に活用する動詞か。

問題 30　「て」「た」が「で」「だ」となるのは、どの行に活用する動詞の場合か。

〔一〇〕　このようにして、四段動詞の活用は次の通りにまとめられる。

基本の形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
書く	か（書）	か／こ	き／い	く	く	け	け
読む	よ（読）	ま／も	み／ん	む	む	め	め
取る	と（取）	ら／ろ	り／っ	る	る	れ	れ
おもな用法		ナイ・ウに連なる	マス・タに連なる	言い切る	トキに連なる	バに連なる	命令の意味で言い切る

〔一一〕

泳がない　泳げない
泳ぎます　泳げます
泳ぐ。　泳げる。
泳ぐ　人　泳げる　人
泳げば　よい　泳げれば　よい
泳げ。

問題 31　上の段の言い方と下の段の言い方とを比べてみよ。意味が同じかどうか。

問題 32　「泳ぐ」は何活用か。

問題 33　「泳げる」は何活用といえるか。活用形は六つそろっているか。

「泳ぐ」に対して「泳げる」があるように、ある種類の動詞には、「できる」という意味を含んだ動詞がある。これを可能動詞ということがある。

問題34　次の動詞には、これに対する可能動詞があるか。

（一）書く　漕ぐ　指す　立つ　死ぬ　這う　飛ぶ　読む　取る

（二）起きる　告げる　來る　勉強する

問題35　右の（一）の動詞はどんなに活用する動詞か。何活用の動詞に可能動詞があるのか。

〔三〕

（一）家が　建つ。　家を　建てる。

（二）糸が　切れる。　糸を　切る。

（三）旗が　揚がる。　旗を　揚げる。

（四）子犬が　生まれる。　犬が　子を　産む。

（五）名が　のこる。　名を　のこす。

（六）列が　乱れる。　列を　乱す。

（七）湯が　沸く。　湯を　沸かす。

人が　起きる。　人を　起す。

右の例を見ると、語の中心をなす部分に共通点のある動詞の間に、活用が違うに従って、その動作や作用を、（一）それ自身だけの働きとして表わすものと、（二）他に対する働きかけ、または他を作り出す働きとして表わすものと、この二種のあることが知られよう。

問題36　右の動詞の活用を一々調べてみよ。

問題37　次の例では、それ〳〵二つの動詞の活用は違うかどうか。その表わしている意味はどうか。

水量が　増す。　水量を　増す。

風が　生ずる。　風を　生ずる。

〔三〕　日が　沈み、月が　出る。

右のように、動詞の連用形は、いったん中止してまた続ける場合に用いることがある。このような用い方を**中止法**という。

〔四〕　動詞には次のようなものがある。

（一）持ち上げる　追い出す　見送る　揺り動かす　飛び立つ

（二）こゝろざす　物語る　えがく

（三）近寄る　長引く　若返る

（四）うわさする　検査する　罰する

右は、二つの単語が合して、一つの複合動詞となったものである。

問題38　右の「持ち」「こゝろ」「近」「うわさ」などの品詞は何か。

恭しめく　学者ぶる　恐ろしがる

右は、他の品詞の単語または語幹に接尾語が加わって、一つの動詞となったものである。

問題39　動詞の活用の種類を挙げよ。また、そのおの〳〵の活用の仕方を言え。

問題40　動詞に「ない」を附けた場合、四段活用は五十音図のどの段に附くのか。また、上一段活用・下一段活用はどうか。

問題41　活用の種類を簡單に見分ける方法を考えてみよ。

問題42　次の文から動詞を抜き出し、その活用の種類を言え。

(一)源作じいさんは、燃えさかる　ほのおの　色を　じっと　見た。それから、おもむろに　立ち上がって、さしわたし　二メートルも　ある、土で　固めた　円形の　かまの　上へ　そっと手を　置いた。かっとした　火氣が　手のひらを　打つ。源作じいさんは、かまが　いら〳〵して　いるなと　感じた。どっかりと、また　かまの　前に　すわって、もく〳〵と　立ち昇る煙を　見つめながら、黄色な　煙が、薄紫色に　変わって　行くのを　心に　念じた。

(二)私どもが、心の中で考えたり感じたりしていることを、言葉で話してみると、その考えや感じが、心の中で思っていた時よりも、はっきりして來ます。

十四　形容詞の活用

〔一〕　形容詞にも活用が有る。例えば、「よい」という形容詞は次のように活用する。

(一)それも　よかろう。
(二)それは　よかった。
(三)だん〳〵　よく　なる。
(四)それは　非常に　よい。
(五)今が　一番　よい　時だ。
(六)よければ　さっそく　実行しよう。

問題1　「よい」の語幹と活用語尾とを区別し、活用語尾がどのように変化するかを言え。

問題2　右の「よい」にならって、「早い」「正しい」を活用させてみよ。右に挙げた六つのほかに違ったものがあるか。

〔二〕　形容詞も動詞の場合と同じように、幾つかの活用形が立てられる。

(一)の「よかろ」は、「う」に連なる時の形で、これを動詞の場合と同じように、未然形という。(二)の「よかっ」は、「た」に連なる時の形である。(三)の「よく」は、「なる」という動詞などに連なる時の形である。(二)と(三)とを合わせて連用形という。

(四)の「よい」は、言い切る時に用いる形であるから、終止形という。

(五)の「よい」は、体言に連なる時の形であるから、連体形という。

(六)の「よけれ」は、「ば」に連なる時の形であるから、仮定形という。

○形容詞には命令形が無い。

問題3　「よい」と「正しい」の活用を表に作れ。

基本の形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
よい	よ						
正しい	ただし						

おもな用法						
連なるに	連なるに	切るに	連なるに	連なるに		

〔三〕　形容詞の打消の言い方は、「よくない」「正しくない」である。この「ない」は、動詞の打消の言い方の「書かない」「來ない」の「ない」と同じものだろうか。

問題 4　「書かない」「來ない」の「書か」「來」は何活用形か。「よくない」「正しくない」の「よく」「正しく」は何活用形か。

問題 5　「書か」「來」と「ない」との間に、「は」「も」などの助詞をさしはさむことができるか。「よく」「正しく」と「ない」との間はどうか。

動詞に附くのは助動詞の「ない」であり、形容詞に附くのは形容詞の「ない」である。

〔四〕　形容詞の連用形が「ございます」「存じます」に連なる時は「白うございます」「寒うございます」などとその語尾が変わる。これは音便の形である。この場合、語尾が変わるだけでなく、語幹にも変化を起すものがある。

からだが　大きゅう　ございます。
あの　辞書は　新しゅう　ございます。
まことに　ありがとう　存じます。

〔五〕　形容詞は、動詞と同様に、それだけで述語となることができる。また、いったん中止する言い方、即ち中止法のあることも動詞と同じである。中止法には連用形のうちの「く」の形が用いられる。

功績は　高く、信望は　すこぶる　厚かった。

また、連用形「く」の形は、それだけで用言を修飾する。

月の　光が　美しく　輝く。
早く　來い。
すばらしく　高い。

しかし、これらは副詞となってしまったのではなく、やはり形容詞の一つの用法に過ぎない。

〔六〕　形容詞は、その語幹だけが用いられることがある。

あゝ、いた(痛)。
おゝ、あつ(熱)。

また、語幹に接尾語「さ」または「み」を附けて名詞とする。

高さ　涼しさ　深み

〔七〕　形容詞には次のようなものがある。

(一)　塩辛い　力強い　心地よい
(二)　蒸し暑い　見苦しい
(三)　細長い　暑苦しい　薄暗い

右は、他の品詞の單語と形容詞とが合して、あるいは形容詞語幹と形容詞とが合してできた複合形容詞である。

問題 6　右の「塩」「蒸し」「細」などの品詞は何か。

こ高い　か細い　お早い　うら寒い　す早い

右は、形容詞に接頭語が附いたものである。

濃こい　重たい　差し出がましい　しめっぽい

右は、名詞、形容詞の語幹、動詞の連用形などに接尾語が附いて、一つの形容詞となったものである。

四角い　黄色い

右は、名詞に形容詞の活用語尾が附いて、形容詞となったものである。

十五　形容動詞の活用

〔一〕　静かだ　さわやかだ　穏やかだ　柔らかだ　おごそかだ　なだらかだ　きれいだ　勇壮だ　じょうぶだ　堅固だ　ていねいだ

これらはいずれも形容動詞である。

〔二〕　形容動詞にも活用がある。今、「静かだ」「じょうぶだ」の活用を調べてみると、

(一)　あの　家は　静かだろう。　　あの　人は　からだが　じょうぶだろう。

(二)　あの　家は　静かだった。　　あの　人は　じょうぶだった。

(三)　この　家は　あまり　静かで　ない。　　あの　人は　じょうぶで　ある。

(四)　静かに　歩け。　　ます〳〵　じょうぶに　なる。

(五)　実に　静かだ。　　たいへん　じょうぶだ。

(六)　静かな　時も　ある。　　からだの　じょうぶな　ことが　第一だ。

(七)　静かなら(ば)　行って　みよう。　　からだが　じょうぶなら(ば)　成し遂げられよう。

問題 1　「静かだ」「じょうぶだ」の語幹と活用語尾とを区別し、活用語尾がどのように変化するかを言え。

問題 2　「さわやかだ」を活用させてみよ。右に挙げた七つのほかに違ったものがあるか。

〔三〕　形容動詞も、動詞や形容詞の場合と同じように、幾つかの活用形が立てられる。

(一)の「静かだろ」「じょうぶだろ」は、「う」に連なる時の形である。動詞や形容詞の場合と同じように、これを未然形という。

(二)の「静かだっ」「じょうぶだっ」は、「た」に連なる時の形、(三)の「静かで」は、「ない」「ある」などの特別の用言に連なる時の形、(四)の「静かに」は、各種の用言に連なる時の形である。これらを合わせて連用形という。

(五)の「静かだ」「じょうぶだ」は、言い切りになる時の形で、終止形という。

(六)の「静かな」「じょうぶな」は、体言に連なる時の形で、連体形という。

(七)の「静かなら」「じょうぶなら」は、これだけで、または「ば」に連なって、仮定を表わす時に用いる形で、仮定形という。

○形容動詞には命令形が無い。

問題 3　「静かだ」「じょうぶだ」の活用を表に作れ。

基本の形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
静かだ							
じょうぶだ							

問題4　次の語を活用させてみよ。

こんなだ　あんなだ　どんなだ　同じだ

問題5　問題4に挙げた語の活用は、普通の形容動詞と少し違った点がある。どの点が違うか。

問題6　「静かだ」の打消は「静かでない」である。「美しい」の打消は「美しくない」である。この両者における「ない」の用い方に異同があるか。

○「静かだ」「じょうぶだ」のていねいな言い方は、「静かです」「じょうぶです」である。この「静かです」「じょうぶです」は、「静か」「じょうぶ」という形容動詞語幹に助動詞の「です」が附いたものである。

〔四〕　形容動詞が、それだけで述語となることは、動詞や形容詞の場合と同じである。また、連用形が中止法として用いられることも同様である。そうして中止法には、次のように「-で」の形が用いられる。

兄は　静かで、弟は　わんぱくだ。

かなとこ雲は、いかにも　壮大で、強烈で、男性的です。

連用形の「-に」という形は、

静かに　お経を　読む。

柔弱に　聞える。

ていねいに　物を　言う。

こまやかに　写し出す。

のように用いられて用言を修飾するが、副詞となったのではなく、やはり形容動詞の一つの用法に過ぎない。

問題7　次の語は副詞か、それとも形容動詞の連用形か。

たちまちに　作り上げた。

こまやかに　作り上げた

すぐに　作り上げた。

〔五〕　形容動詞の語幹が、それだけで用いられることがある。

おゝ、静か。

みごと、みごと。

形容動詞から名詞を**作る**には、語幹に接尾語「さ」を附ける。

静かさ　けなげさ　勇敢さ

〔六〕　こぎれいだ　お静かだ　ご苦労だ

右は、形容動詞に接頭語「こ」「お」「ご」が附いたものである。

四角だ　黄色だ　茶色だ

右は、「四角」「黄色」「茶色」という名詞に、形容動詞の活用語尾が附いて、形容動詞となったものである。

問題8　次の文から形容詞・形容動詞を抜き出し、その活用を言え。

（一）湖畔の　道は、柔らかな　霧の　中に、蜂の白く　どこまでも　続く。こう　いう　道を　ひとり　静かに　歩くのは、往来の　激しい　都会などで、せか〳〵と　あわたゞしく　歩くのに　比べると、別世界のような　感じが　する。しんと　して　清らかで、深山　幽谷を　行く　趣が　ある。

（二）親切にしてやれば　馬鹿どすなおで、りこうなものはない。

十六　助動詞の接続と活用（一）

〔一〕

（一）本を　買う。
（二）本を　買わない。
（三）本を　買います。
（四）本を　買った。
（五）本を　買わせる。
（六）本を　買いました。
（七）本を　買わせない。
（八）本を　買わせませんでした。

問題1　右の例文を、意味の上からそれ〴〵比べてみよ。

問題2　その意味の違いは、どの部分で表わされているか。

問題3　それ〴〵の例文には、助動詞が幾つ用いてあるか。

問題4　助動詞に活用の有ることを、右の例文について示せ。

〔二〕

（一）話す
起きる
受ける
来る
運動する
（二）美しい
（三）静かだ
（四）生徒

（一）ない
（二）ます
（三）た
（四）う（よう）
（五）らしい

問題5　右に挙げた助動詞のうち、動詞に附くものはどれか。形容詞に附くもの、形容動詞に附くもの、体言に附くものはどれか。

問題6　用言に附くものは、用言のどんな活用形に附くか。

〔三〕右によっても知られる通り、助動詞のうち、あるものは用言に附いていろ〳〵の意味を加えてその叙述を助け、あるものは体言などに附いてこれに叙述する意味を加える。そうして、用言に附く時、用言のどんな活用形に附くかが助動詞ごとにきまっている。

〔四〕**せる　させる**

（字を　書く。
（字を　書かせる。

（人が　見る。
（人に　見させる。

右の言い方を比べてみよ。「せる」「させる」は、右のように、使役、即ち他に動作をさせる意味を表わす。

「せる」「させる」は次のように活用する。

（一）少しも　本を　読ませない。　少しも　考えさせない。
（二）大いに　本を　読ませます。　ゆっくり　考えさせます。
（三）本を　読ませる。　静かに　考えさせる。
（四）読ませる　時は　良書を　與える　考えさせる　ことが　よいのだ。
ことが　大切だ。
（五）読ませれば　読ませるほど　よい。　もっと　考えさせれば　よい。
（六）もっと　おもしろい　本を　読ま　もっと　考えさせろ（させよ）。
せろ（せよ）。

問題7　動詞にならって、「せる」「させる」の活用を表に作れ。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
せる						
させる						

おもな用法	ナイに連なる	マスに連なる	言い切る	トキに連なる	バに連なる	命令の意味で言い切る
せる						
させる						

問題8　「せる」「させる」の活用は、用言のどの活用と同じか。

問題9　次の動詞にそれ〴〵「せる」「させる」を附けてみて、「せる」の附く動詞と、「させる」の附く動詞とを分けよ。

知る　打つ　用いる　附ける　疲る　喜ぶ　射る　受ける　來る　相談する

問題10　「せる」が附くのと「させる」が附くのとは、一つ〳〵の動詞で違っているのか。それとも、動詞の活用の種類によって分かれるのか。

問題11　「せる」「させる」は、動詞のどんな活用形に附くか。

〔五〕**れる　られる**

読書に　心を　奪われる。
人から　話しかけられる。

問題12　右の「れる」「られる」の活用を調べて活用表を作れ。

問題13　この活用は用言のどの活用と同じか。

問題14　次の動詞に「れる」「られる」を附けてみて、そのおの〳〵がどのような種類の動詞に附くかを明らかにせよ。

取る　呼ぶ　見る　笑う　呼える　來る　喜ぶ　投げる　捨てる　打つ　褒める　称揚する

○サ変の動詞には、その未然形「さ」に「れる」が附いて「される」となる。但し、未然形「せ」に「られる」が附いて「せられる」となることもある。

問題15　助動詞「せる」「させる」に「れる」「られる」を附けてみよ。

言わせる　見させる

問題16　「れる」「られる」は、動詞及び助動詞「せる」「させる」のどんな活用形に附くか。

（一）追い越したり　追い越されたり　しながら、東海道を　歩き続けた。

お互に　助けたり　助けられたり　する。

（二）正午までには　頂上に　登られる。

夕方までには　おりられる。

（三）忘れようと　しても、どうしても　思い出される。

故郷の　母の　ことが　案じられる。

（四）野田先生が　先頭に　立たれ、石井先生が　みんなの　後から　來られた。

問題17　右の「れる」「られる」について、その表わす意味が同じかどうかを考えてみよ。

〔七〕例文（一）の「れる」「られる」は、受身、即ち他から動作を受ける意味を表わす。

〔八〕例文（二）の「れる」「られる」は、可能、即ち「できる」という意味を表わす。可能の意味を表わす場合には命令形が無い。

〔九〕可能の意味を表わすには、動詞に「れる」「られる」を附ける言い方のほかに、「登れる」という可能動詞を用いたり、「おりることができる」のような言い方をすることが少なくない。

〔一〇〕例文（三）の「れる」「られる」は、自発、即ち動作が自然に起る意味を表わす。自発の意味を表わす場合には命令形が無い。

〔一一〕例文（四）の「れる」「られる」は、尊敬の意味を表わす。尊敬の意味を表わす場合には命令形が無い。

〔一二〕尊敬の意味を表わすには、動詞に「れる」「られる」を附ける言い方のほかに、尊敬の意味を持つ特別の動詞を用いたり、または「おいでくださる」「おいであそばす」「おいでなさる」「おいでになる」のような言い方をすることが多い。

問題18　次の語に対する尊敬の言い方を言え。

來る　來い　行く　行け　居る　居ろ　書く　書け　読む　読め

〔一三〕「せる」「させる」に「られる」の附いてできた「せられる」「させられる」は、「れる」「られる」よりもいっそう改まった尊敬の意味を表わすことがある。

殿下には　随員を　随えさせられて、御渡欧の　御途に　就かせられた。

問題19　次の文の「れる」「られる」は受身か、可能か、自発か、あるいは尊敬か。

（一）先生は、仰げば　仰ぐほど　高く、接すれば　接するほど　奥深い　お方だ。大きな　力で、ぐ

んぐんと　人を　引っぱって　行かれる。とても、先生には　追いつけないから、もう　よそうと　思っても、やはり　ついて　行かないでは　いられない。

（三）法隆寺が、千三百年後の今日まで、そのまゝ保存されているのは、世界にもまれに見られることで、それによっても、当時の建築がすぐれていたことも思い合わされるのであります。

〔一四〕ない　ぬ（ん）

よく　氣を　つけて　見ると、はっきり　します。
よく　氣を　つけて　見ないと、はっきり　しません。

右の言い方の違いを考えてみよ。

（一）松阪の　町の　はずれまで　行っても、それらしい　人は　見えない。次の　宿の　先まで　行って　みたが、やはり　追いつけなかった。

辞書が　買えなければ、辞書を　借りて　写そう。

（三）昔は　水田は　開けず、畑の　作物は　できず、所に　よっては　飲み水にも　困るくらいでした。

右のように、「ない」「ぬ（ん）」は打消を表わす。

問題20　「ない」の活用を調べて活用表を作れ。

問題21　「ない」の活用は、用言のどの活用と同じか。

○「ない」に「て」を附けると「なくて」となるが、この「なくて」と同じ意味を表わすのに「ないで」という形を用いることがある。

「ぬ（ん）」は次のように活用する。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
ぬ（ん）	○	ず	ぬ（ん）	ぬ（ん）	ね	○
おもな用法		中止法	切言い	連トキに	連バに	
			る	なる	なる	

問題22　用言の活用に、この活用に似たものがあるか。

問題23　次の語に「ない」「ぬ」を附けよ。

飛ぶ　告げる　出る　見る　過ぎる　來る　する　飛ばせる　來させる　読まれる　見られる

問題24　動詞「ある」に、「ない」「ぬ」が附くか。

問題25　「ない」「ぬ」は、動詞及び助動詞「せる」「させる」「れる」「られる」のどんな活用形に附くか。

問題26　次の文の空白の箇所に適当な言葉を入れよ。

少しも　運動□ない。
少しも　運動□ぬ。

問題27　次の言葉のていねいな言い方を言え。

書かない　出させない　飛ばれない

問題28　次の文の「ない」はみな同じものかどうか。

（一）徳の　ある　者なら、天が　助ける　はずだ。助けない　ところを　見ると、先生は　まだ　君子では　ないのか――子路には、ひょっとすると、そう　いう　考えが　わいたのかも　知れない。

（三）長谷川君が予に紹介された時、かれはたゞ一、二語しか言わなかった。しかも、その言葉は、普通にありふれた空虚な辞令ではなかった。

問題29　形容詞の「ない」と助動詞の「ない」とは、どういうところで区別されるか。

〔一五〕　う　よう

（一）傾斜は、少なくとも　四、五十度以上は　あろう。
ほう、きみが　世話を　すると　言うのか。よかろう。
あと　四年で　明治維新の　幕が　切って　落されようと　いう　時の　ことです。

（三）はいって　みよう。そうして　一曲　ひいて　やろう。

右の（一）の「う」「よう」と、（二）の「う」「よう」とを比べてみよ。（一）は話し手が他を推量する意味を表わす。（二）は話し手の意志を表わす。

「う」「よう」は語形変化が無い。しかし、終止形として用いられるほかに、次のような用法がある。

あろう　ことか、あるまい　ことか。
あれでは　承諾しよう　はずが　ない。

但し、どの体言にでも連なるというのではなく、ある種の体言に限って連なるのである。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
う	○	○	う	（う）	○	○
よう	○	○	よう	（よう）	○	○
おもな用法		言い切る		（コトに連なる）		

問題30　「う」と「よう」とは、上に來る語によって、いずれか一方が用いられる。次の語に「う」「よう」を附けてみて、そのおのおのがどのような種類の活用に附くかを明らかにせよ。

書く　起きる　投げる　來る　よい　靜かだ　行かせる　來させる　行かれる　來られる　知らない

問題31　「う」「よう」は、用言及び助動詞のどんな活用形に附くか。

問題32　サ行変格活用の「する」「勉強する」に「う」または「よう」を附けてみよ。

〔一六〕　推量する意味を表わす場合には、動詞・形容詞の未然形に「う」「よう」を附けた言い方よりも、動詞・形容詞の終止形に「だろう」「でしょう」を附けた言い方を用いることが多い。

ダムは　もう　すぐ　完成するだろう（でしょう）。
外は　寒いだろう（でしょう）。

十七　助動詞の接続と活用（二）

〔一七〕 たい

お預けした　品の　お引き渡しを　願いたいと　思います。

そんなに　帰りたければ　帰れ。

右のように、「たい」は、自身の希望する意味を表わす。

問題33　この活用を調べて活用表を作れ。

問題34　この活用は用言のどの活用と同じか。

問題35　次の語に「たい」を附けてみよ。

書く　起きる　受ける　來る　勉強する　書かせる　見させる　知られる　見られる

問題36　「たい」は、動詞及び助動詞のどんな活用形に附くか。

問題37　「見たい」に「ございます」「存じます」を附けてみよ。

〔一八〕 ます

昨日　お伺い　致しましたが、お留守で　お目に　かゝれませんでした。明日にでも　また　お訪ねして　みます。

右のように、「ます」は、聞き手に対して、話し手が物をていねいに言う場合に用いる。「ます」は次のように活用する。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
ます	ませ ましょ	まし	ます	ます	ますれ	まし （ませ）
おもな用法	連なる ン・ウに	連なる タに	切る 言い	連なる トキに	連なる バに	命令の意味で言い切る

○仮定形に「ば」を附けた形、即ち「ますれば」という言い方は、普通には用いない。この場合は「ましたら」という形を用いる。

あちらに　着きましたら、さっそく　手紙を　差し上げます。

問題38　用言の活用に、この活用に似たものがあるか。

問題39　次の語に「ます」を附けよ。

行く　見る　受ける　來る　勉強する　聞かれる　起きられる　知らせる　掛けさせる

問題40　「ます」は、動詞及び助動詞のどんな活用形に附くか。

問題41　「なす」の命令形「まし」（ませ）を次の語に附けてみて、附くか附かないか、考えてみよ。

（一）言う　見る　受ける　來る　する

（二）おっしゃる　なさる　いらっしゃる

〔一九〕 た（だ）

（一）けさは　五時に　起きた。

（二）授業は　今　すんだ。

（三）壁に　掛けた　絵。　　世界に　すぐれた　文学。

右のように、「た」は、（一）過去を表わし、（二）完了、即ち動作または事件が完結することを表わし、（三）「てある」「ている」の意味を表わす。「た」は次のように活用する。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
た	たろ	○	た	た	たら	○
おもな用法	連ウなるに		切言るい	連トキなるに	連バなるに	

○仮定形「たら」は、「ば」を伴なわず、そのまゝで仮定の意味に用いる。

○「見たり聞いたり」の「たり」は、この助動詞の連用形ではなく、助詞である。

問題 42　用言の活用に、この活用に似たものがあるか。

問題 43　次の語に「た」を附けてみよ。

書く　騒ぐ　出す　立つ　死ぬ　飛ぶ　読む　笑う　取る　越える　来る／活動する

雄々しい　勇敢だ　行かせる　考えられる　起きます　話したい　知らない

問題 44　「た」は、用言及び助動詞のどんな活用形に附くか。音便の形に附くのは何活用の動詞か。

〔三〇〕そうだ

（一）行きそうだ。　　行くそうだ。

（二）高そうだ。　　高いそうだ。

（三）静かそうだ。　　静かだそうだ。

（四）知らなそうだ。　　知らないそうだ。

問題 45　右の上段の「そうだ」と下段の「そうだ」は、意味の上でどう違うか。

問題 46　上の語への続き方はどう違うか。

〔三一〕

さけや　ますの　泳ぎまわって　いそうな　場所を　さがす。

だるそうに　歩いて　いました。

さも　くやしそうで　ある。

いかにも　じょうぶそうだった。

右のように、この「そうだ」は、様態、即ちそういう様子だという意味を表わす。

問題 47　様態の「そうだ」はどう活用するか。活用表を作れ。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
そうだ						
おもな用法	連ウなるに	連タ・アル・ナルに連なる	切言るい	連トキなるに	連バなるに	

○仮定形「そうなら」は、「ば」を伴なわず、そのまゝで仮定の意味に用いる。

問題 48　この活用は用言のどの活用と同じか。

問題49　様態の「そうだ」は、動詞・形容詞・形容動詞のどんな活用形、またはどんな形に附くか。助動詞にはどうか。

○形容詞の「よい」「ない」に「そうだ」が附く場合は、「よさそうだ」「なさそうだ」となる。

この　辞書は　よさそうだ。

元氣の　なさそうな　若い　男が、服を　縫って　いる。

但し、助動詞の「ない」の場合は「知らなそうだ」である。

〔三〕　その　他の　山々も　見えるそうだが、きょうは　何も　見えない。

あそこは　たいへん　暑いそうだ。

みなさん　お元氣だそうで　安心しました。

この「そうだ」は傳聞を表わす。傳聞の「そうだ」は、次のように活用する。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
そうだ	○	そうで	そうだ	○	○	○
おもな用法		アルに連なる	言切る			

問題50　傳聞の「そうだ」は、用言及び助動詞のどんな活用形に附くか。

〔三〕　まい

（一）自分とても、かれらを　法衣の　そでに　くるんで　助けたいのは　やまくで　ある

が、それは　かえって　かれらの　心で　あるまい。

その　話は　だれも　知るまい。

（三）私は　参りますまい。

それに　つけても、御主君、尼子家の　御恩を　忘れまいぞ。

右のように、「まい」は、（一）打消と推量とを兼ねた意味を表わし、また、（二）意志を表わす。

「まい」は、「う」「よう」と同じく語形変化が無い。しかし、終止形として用いられるほかに、次のような用法がある。

あろう　ことか、あるまい　ことか。

但し、どの体言にでも連なるというのではなく、ある種の体言に限って連なるのである。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
まい	○	○	まい	（まい）	○	○
おもな用法			言切る	（コトに連なる）		

問題51　次の語に「まい」を附けてみよ。

（一）書く　読む　行きます

（二）起きる　受ける　來る　旅行する　行かせる　來させる　行かれる　來られる

「まい」は、四段活用の動詞には、その終止形に附く。上一・下一・カ変の動詞には、その未

然形に附く。サ変の動詞には、未然形の「し」に附く。また「まい」は、助動詞の「ます」には、その終止形に附き、「せる」「させる」「れる」「られる」には、その未然形に附く。

問題52　次の文の空白の箇所に適当な言葉を入れよ。

今度は　多分　失敗□まい。

かれも　もう　なまけは　□まい。

十八　助動詞の接続と活用（三）

〔二四〕ようだ

音楽が　流れるように　聞えて　來た。

形は　まくわうりのようで、味は　熟し柿そっくりの　マンゴー。じゃがいものような　かっこうで　砂糖のように　あまい　サオ。

何を　言ったのか　かれ自身にも　わからないようだった。

北國では　もう　雪が　降ったようだ。

もし　東京へ　帰るようなら、これを　持って　行って　下さい。

そのような　ことでは　成功は　おぼつかない。

右のように、「ようだ」は、他にたとえて言うのに用い、また、不確かな断定を表わすのに用いるが、そのほか、例示に用いることがある。「ようだ」は次のように活用する。

基本の形	未然形	連形用	終止形	連体形	仮定形	命令形
ようだ	ようだろ	ようだっ ようで ように	ようだ	ような	ようなら	○
おもな用法	連ウ（なる）に	タ・アル・ナルに連なる	言い切る	連トキに（なる）	連バ（なる）に	

○仮定形「ようなら」は、「ば」を伴なわず、そのまゝで仮定の意味に用いる。

問題53　この活用は用言のどの活用と同じか。

問題54　次の語に「ようだ」を附けてみよ。

飛ぶ　延びる　消える　來る　練習する　悪い　柔らかだ　行かない　過ぎた　切られる　改めさせる

問題55　「ようだ」は、用言及び助動詞のどんな活用形に附くか。

問題56　用言及び助動詞のほか、どんな語に附くか。

〔二五〕らしい

あれは　学校らしい。

開会は　九時からしい。

簡単に　解決するらしく　思われた。

問題は　やさしいらしい。

昔は　かなり　にぎやからしかった。

さも　驚いたらしい　様子で　ある。

右のように、「らしい」は、推定する意味を表わす。「らしい」は次のように活用する。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
らしい	○	らしかっ らしく	らしい	らしい	○	○
おもな用法		連用タ・ナルに	言切る	連体トキなる		

問題57　用言の活用に、この活用に似たものはないか。

問題58　「らしい」はどんな品詞に附くか。

問題59　次の語に「らしい」を附けてみよ。

書く　見る　敵える　來る　旅行する　よい　柔らかだ　書かせる　見られる　見たい

見ない　見た

問題60　「らしい」は、動詞・形容詞・形容動詞のどんな活用形、またはどんな形に附くか。

助動詞にはどうか。

問題61　「行くらしい」に「ございます」を附けてみよ。

問題62　接尾語にも「らしい」というのがある。次の文の「らしい」は、助動詞か接尾語か。

暗くて　よく　わからないが、どうも　子供らしい。

あの　男は　いつまで　たっても　子供らしい。

〔三六〕だ　です

月は　死の　世界だ。

きょうは、あの　山より　もっと　高く　登るのだぞ。

生物に　とって、太陽ほど　ありがたい　ものが　あるだろうか。

なんと　いう　うるわしい　友情だったろう。

私が　浦島なら、玉手箱は　あけなかったでしょう。

こゝは、学校です。

この　木の　汁を　集めて　固めると、ゴムが　できるのです。

たゞ　泣くばかりでした。

右のように、「だ」「です」は、断定する意味を加えて述語の文節を作る。

問題63　「だ」と「です」は、共に断定の助動詞であるが、意味の上でどんな違いがあるか。

問題64　「だ」「です」は、右の例文ではどんな品詞に附いているか。

「だ」は次のように活用する。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
だ	だろ	だっで	だ	（な）	なら	○
おもな用法	連ウなる	に連タ・アルなる	言切る	に連ノ・ノデなる	（連バなる）	

○仮定形「なら」は、「ば」を伴なわず、そのまゝで仮定の意味に用いる。

○連体形「な」は、助詞「の」「ので」「のに」に連なる場合だけに用いる。

山は　今　春なのだ。

春なので、一面に　花が　咲き乱れて　いる。

もう　春なのに　風は　なか〳〵　冷たい。

なお、この「のに」は、終止形「だ」から連なることもある。

問題 65　用言の活用に、この活用に似たものはないか。

問題 66　形容動詞の語尾変化と比べてみよ。どの点が違うか。

「です」は次のように活用する。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
です	でしょ	でし	です	（です）	○	○
おもな用法	ウ連なる	タ連なる	言い切る	ノデ連なる		

○連体形「です」は、「ので」「のに」に連なる場合だけに用いる。

お天氣ですので、きょうは　山に　登りたいと　思います。

お天氣ですのに、どうして　お出かけに　ならないのですか。

問題 67　用言の活用に、この活用に似たものがあるか。

「だ」「です」は、体言や、ある種の助詞に附く。但し、その未然形に助動詞「う」の附いたもの、及び「なら」は、「行くだろう」「白いでしょう」「行くなら」「白いなら」のように動詞・形容詞にも附く。

「です」は、形容動詞及び助動詞「そうだ」「ようだ」には、「静かです」「勇敢です」「さびしそうです」「山のようです」のように、その語幹に附く。

〔二七〕　口語の助動詞は、だいたい右に述べた通りである。そうして、以上は、どんな種類の語、またはどんな活用形に附くかによって、順序立てたものである。

問題 68　（イ）用言だけに附くのは、どの助動詞か。

（ロ）動詞だけに附くのは、どの助動詞か。

（ハ）動詞のほか、形容詞にも附くことのできるのは、どの助動詞か。形容動詞に附くことのできるのは、どの助動詞か。

問題 69　（イ）用言及び助動詞の未然形に附くのは、どの助動詞か。

（ロ）連用形に附くのは、どの助動詞か。

（ハ）終止形に附くのは、どの助動詞か。

問題 70　用言及び助動詞以外の語に附くことのできるのは、どの助動詞か。

〔二八〕　すでに調べて來たように、助動詞にはいろ〳〵活用の違ったものがある。故に助動詞は、その活用の仕方に基づいて、幾つかの種類に分けることができる。

問題 71　（イ）動詞と同じ活用、またはこれに準ずる活用をするものはどれか。それは、動詞のどの種類の活用と同じか。

（ロ）形容詞と同じ活用、または**これ**に準ずる活用をするものはどれか。
（ハ）形容動詞と同じ活用、または**これ**に準ずる活用をするものはどれか。
（ニ）用言とは違った特殊の活用をするものはどれか。
（ホ）語形変化の無**いものはどれ**か。

〔二九〕　私どもは　日本人で　ある。
　　よごれて　いる　帽子。

右の「日本人である」は「日本人だ」、「よごれている」は「よごれた」と同じ意味である。即ち、この「である」が助動詞「だ」に、「ている」が助動詞「た」に当たるのであって、「である」「ている」が助動詞のような働きをしていることがわかる。即ち、「日本人である」「よごれている」は、文節からいうと二文節であるが、この二文節で、他の場合の一文節に当たるような働きをしているのである。このように、二文節で他の場合の一文節に当たるような働きをしているものは、このほかにもある。

新聞を　読んで　いらっしゃる。
机の　上に　本が　置いて　ある。
どうか　話して　ください。
お目覚めに　なる。
しるしを　附けて　おく。
書いて　しまう。
驗しに　やって　みる。

問題72　次の文から助動詞を抜き出し、その活用の仕方を示せ。

（一）用光は、逃げようにも　逃げられず、戦おうにも　武器が　なかった。どても　助からぬと　覚悟を　きめた。
（二）こう　なっては、お前たちには、とても　かなわない。私も　覚悟を　した。私は　樂人で　ある。今　こゝで、命を　取られるのだから、この世の　別れに、一曲だけ　吹かせて　もらいたい。
（三）これが、名人と　いわれた　自分の　最後の　曲だと　思って、用光は、靜かに　吹きはじめた。曲の　進むに　つれて、用光は、自分の　笛の　音に　醉ったように、たゞ　一心に　吹いた。
（四）和尚さんは、どんなにさびしかったろうと思って、急いで行って見ると、びっくりしました。大きなねずみが一匹、雪舟の足もとに居て、今にも飛びつきそうな様子です。かまれては、かわいそうだと思って、和尚さんは、「しっ、しっ。」と追いましたが、不思議に、ねずみは、じっとして動きません。

問題73　次の文に誤りがあったら正せ。

（一）その　夜は　まんじりとも　しず、机に　向かって　かの　曲を　譜に　書き上げた。
（二）孝行しやうと　思う　時に　親は　ないの　嘆きを　せないように　せなければ　なりません。
（三）よもや　失敗は　するまいと　思うが　どうだろう。

十九　助詞の種類と用法

〔一〕

(一) 戸が　あく。
　　戸を　あける。

(二) 私は　参りません。弟は　参ります。
　　私は　参りませんが、弟は　参ります。

(三) 私は　馬に　乗れます。
　　私でも　馬に　乗れます。

(四) これは　あなたの　本です。
　　これは　あなたの　本ですか。

(五) 勇が　正雄に　本を　與えた。
　　正雄が　勇に　本を　與えた。

(一) 学力が　増す。
(二) 学力を　増す。

問題 1　右の例文について、助詞がどのような働きをしているか、考えてみよ。

問題 2　右の例文の助詞は、どんな品詞に附いているか。

このように、助詞は、語に附いてその語と他の語との関係を示し、あるいはこれに一定の意味を添える。故に、助詞においては、どういう語に附き、どういう語にかゝって行くかを明らかにすることが大切である。この点から助詞を類別すると、だいたい四種類になる。

〔二〕第一類

が

(一) 鳥が　鳴く。
　　説明が　ていねいだ。
(二) 水が　飲みたい。
　　字が　読める。

の

(一) 冬の　風が　吹く。
　　母としての　慈愛。
(二) 私の　読んだ　雑誌。
(三) お茶の　飲みたい　方。
(四) つばめの　飛ぶのは　速い。
　　きれいなのを　下さい。
　　きみが　そう　言ったのか。

頭が　痛い。
正直なのが　一番だ。
本が　ほしい。
勉強するのが　好きだ。

朝の　さわやかな　空氣。
故郷からの　便り。
人の　居ない　島。
英語の　話せる　人。
新しいのが　よい。
これは　私のです。
はい、私が　そう　申したのです。

○この「の」が「だ」「です」に連なる場合には、時に「ん」となることがある。
　網の　綱を　しっかり　つないで　おくんだぞ。
　今　すぐ　お出かけに　なるんですか。

を

に

(一)手紙を　書く。
　読書を　好む。
(二)門前を　通る。
(三)山小屋を　出発する。

(一)室内に　居る。
　朝　五時に　起きる。
(二)大阪に　着く。
(三)学者に　なる。
(四)見学に　行く。
(五)雨に　降られる。

へ

(一)南へ　向かう。
(二)こちらへ　いらっしゃい。
(三)これは　あなたへ　差し上げます。

と

(一)弟と　遊ぶ。
(二)政治家と　なる。

卵を　産む。
美しいのを　買う。
橋を　渡る。
懐かしい　故國を　離れる。

山に　咲く。
上空に　達する。

医者を　呼びに　やる。
弟に　本を　読ませる。

奥へ　進む。
盆へ　載せる。

叔父さんと　出かける。

(三)よろしくと　言った。
(四)筆と　紙とを　下さい。

から

(一)こゝから　出発します。
　一時から　はじまります。
(二)私から　一同に　申し傳えます。
(三)出かけてからが　心配だ。

より

(一)女は　男より　ていねいな　言葉を　使う。
(二)そう　するより　仕方が　ない。

で

(一)筆で　書く。
(二)庭で　遊ぶ。
　俳句で　これを　「雲の峰」と　いう。
(三)雨で　お困りでしょう。

や

　馬や　牛が　飼ってある。
　米や　麦を　供出する。

二、三日中に　帰るだろうと　思う。
電車と　自動車が　走る。

大陸の　旅行から　帰る。
頂上からの　展望。

汽車で　帰る。
田舎で　生まれました。

友達の　ことで　迷惑した。

問題3　この類の助詞はどんな品詞に附くか。また、どんな語にかゝって行くか。右の例文について調べてみよ。

問題4　用言に附く時は、どんな活用形に附くか。

問題5　助詞に附く時は、どんな助詞に附くか。

この類の助詞は、主として体言に附いて、その体言が、同じ文中の他の語に対してどんな関係に立つかを示すものである。これを格助詞ということがある。

〔三〕第二類

ば

㈠読めば　わかる。　よければ　買おう。

㈡風が　吹けば　波が　立つ。

㈢魚も　とれば　狩もした。　木も　切れば　網も　すいた。

と

㈠読むと　わかる。

㈡風が　吹くと　波が　立つ。

㈢家へ　帰ると　日が　暮れた。　種を　まくと　かわいい　芽を　出した。

㈣どう　なろうと　かまわない。

問題6　第一類の「と」と、どう違うか。

ても（でも）

見ても　わかるまい。

悲しくても　泣かない。

いくら　呼んでも　返事が　なかった。

問題7　「でも」となるのはどういう場合か。

けれど（けれども）

降って　いるけれど（けれども）　たいした　ことは　ない。

少し　寒いけれど（けれども）　がまんしよう。

花も　きれいだけれど（けれども）　第一　においが　よい。

が

㈠つらいが　がまんしよう。　風は　吹くが　寒くは　ない。

㈡運動も　するが　勉強も　する。

問題8　次の文の「が」を区別せよ。

万葉集には　短歌が　多いが、後世の　歌集に　比べて　長歌の　多いのが　一つの　特色と　なって　いる。

のに

よせと　言うのに　やめない。

こんなに　寒いのに、それでも　薄着で　いる。

いつも　ひまだ（な）のに、どうして　來ないのだろう。

ので

雨が　降るので　遠足は　やめた。
道が　遠いので　骨が　折れる。
あたりが　静かなので　よく　聞える。

から

雨が　降るから　遠足は　やめた。
道が　けわしいから　骨が　折れる。
計算が　困難だから　正確には　わかりません。
失敗しても　よいから　最後まで　やれ。

問題 9　第一類の「から」と、どう違うか。

し

雨も　降るし、風も　吹く。
夏は　涼しいし、冬は　暖かい。

て（で）

㈠見て　來る。　　赤くて　美しい。
飛んで　來い。
㈡雨が　降って　いる。　　どうぞ　見て　下さい。
動かないで　下さい。

㈢雨が　降って　行けなかった。

問題 10　「で」となるのはどういう場合か。

ながら

㈠泣きながら　歌い、歌いながら　泣いた。
㈡幼いながら　よく　働く。　　知って　いながら　致えない。

たり（だり）

子供たちが　出たり　はいったり　して　遊んで　いる。
跳んだり　はねたり　する。

問題 11　「だり」となるのはどういう場合か。

問題 12　この類の助詞はどんな品詞に附くか、右の例文について一々調べてみよ。

問題 13　この類の助詞は、用言や助動詞に附いて、上の語の意味を、接続詞のように、下の用言、または用言に準ずるものに続けるものである。これを接続助詞ということがある。

〔四〕第三類

は

私は　知りません。
鯨は　魚では　ない。
寒くは　ないか。

この　池には　魚が　居ない。
太陽は　東から　出る。
それほど　りっぱな　人とは　思わなかった。
知っては　いるが、教えられない。

も

㈠私も　知りません。　私にも　下さい。
寒くも　ない。　五尺も　ある　厚い　氷。
㈡足も　手も　顔も、ほこりに　まみれる。
痛くも　かゆくも　ない。　子供も　泣き、大人も　泣いた。

こそ

㈠私こそ　失礼しました。
㈡泳ぎを　知って　いたからこそ　助かったのだ。

さえ

㈠水さえ　のどに　通らない。　手にさえ　取らない。
㈡湯さえ　あれば　結構です。　行きさえ　すれば　よいのだ。
㈢杖とも　柱とも　頼む　ひとり子にさえ　別れた。
頼もしささえ　感じられた。

でも

子供でも　知って　いる。
私にでも　できます。
倒れでも　すると　困る。
乗物が　なければ、歩いてでも　行く。

しか

五時間しか　寝ない。
そうとしか　考えられない。
太陽でも　月でも　おぼろにしか　見えない。

まで

㈠どこまで、行くのだろう。　十一時までも　かゝった。
㈡子供にまで　笑われる。

ばかり

㈠二時間ばかり　休んだ。
㈡目先の　ことばかり　考えて　いる。
きれいなばかりで　何の　役にも　立たない。

だけ

㈠それだけ　読めれば　十分だ。　できるだけの　手を　盡くした。
㈡私だけが　知って　いる。　見ただけで　帰った。

父にだけ　話した。

問題14　次の文の意味は同じかどうか。

（私だけが　聞いて　いる。
（私しか　聞いて　いない。

ほど

三分の一ほど　書き上げた。
行けば　行くほど　けわしく　なる。
今までほどは　寒くは　あるまい。

くらい（ぐらい）

㈠私でも　絵ぐらいは　かける。　遊びにぐらい　來ても　よかろう。
㈡その　大きさは　ぼくらの　頭を　おゝうくらいです。

など

絵などを　かいて　遊ぶ。
なら　かえでなどの　木々。
病人が　この　寒空に　出かけるなど　とんでもない。

なり

㈠せめて　私になり　知らせて　いたゞきたかった。
㈡あなたなり　私なり、だれか　残って　いましょう。
行くなり　やめるなり、早く　おきめなさい。

やら

㈠だれやらが　言って　いた。　だれにやら　渡した。
㈡珍しいやら　樂しいやら、まるで　夢のようだ。

か

㈠だれかに　尋ねて　みよう。　腰掛が　何脚か　ある。
いつか　行きたいと　思います。　どう　したのか、その　子は　急に　泣き出した。
大陸の　氣候は　私に　合うのかも　知れません。
㈡父か　母(か)が　参上します。　電話を　かけるか　使いを　やるか　します。
朝顔雲とか　かなとこ雲とか　いいます。

問題15　この類の助詞はどんな品詞に附くか。例文について調べてみよ。

この類の助詞は、概して、体言や用言、その他いろ〳〵の語に附いて、副詞のように、下の語にかゝって行くものである。これを副助詞ということがある。

問題16　第一類の助詞と第三類の助詞のあるものとは、これを重ねることができる。その例を挙げよ。

問題17　第三類の助詞は、互に重なり合うことができる。その例を挙げよ。

〔五〕　第四類

か

(一)お前も　見たいか。

(二)そんな　ことが　あるものか。(あるものですか。)

問題18　第三類の「か」と、どう違うか。

問題19　次の「か」を区別せよ。

「どうしました。子供たちと　言い合いでも　したのですか」と　言いながら　見上げた　尼さんの　顔は、この　子と　どこか　似た　ところが　ある。

な

一匹も　逃がすな。

この　光栄を　忘れるな。

決して　御心配下さいますな。

な(なあ)

うれしいな(なあ)。

愉快だな(なあ)。

天氣が　くずれるな　と　思わせるのが　この　雲だ。

問題20　次の「な」を区別せよ。

降りそうだな　と　思ったが、そのまゝ　出かけようと　すると、「かさを　忘れるな。」と　兄が　言った。

ぞ

そら　行くぞ。

なか〳〵　つらいぞ。

きっと　大漁だぞ。

とも

勉強するとも。

それは　美しいとも。

よ

さあ、御飯ですよ。

雨が　また　降るらしいよ。

ね

それはね、たいへんでしたよ。

きょうは　珍しく　勉強して　いるね。

さ

勉強するさ。

それがさ、うまく　行かないんだよ。

問題21　この類の助詞はどんな品詞に附くか。例文について調べてみよ。

この類の助詞は、体言や用言、その他いろ〳〵の語に附き、文の終りにあって、疑問・禁止・詠嘆・感動などを表わすものである。これを終助詞ということがある。これらのうち「ね」「さ」

は文の中にも用いる。

問題22　体言、または体言に準ずるものにだけ附く助詞には、どんなものがあるか。

問題23　用言及び助動詞にだけ附く助詞には、どんなものがあるか。

問題24　用言及び助動詞に附くことのできる助詞には、どんなものがあるか。

問題25　用言に附く助詞について、用言のどの活用形に附くかを調べてみよ。

〔六〕今まで調べて來たことによって、口語では品詞が幾つあるかということ、單語には活用の有るものと無いものとがあること、活用の有る單語はどのように活用するかということ、單語には自立語と附屬語とがあって、自立語と附屬語とが結びつく時どのような結びつき方をするかということなどが、わかったはずである。

附　表

（第一表）動詞活用表

種類	四段	上一段
行名		
例語		
語幹		
未然形		
連用形		
終止形		
連体形		
仮定形		
命令形		

サ変	カ変	下段

（第一表）形容詞活用表

例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形

（第二表）形容動詞活用表

例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形

（第四表）助動詞活用表

種類	語	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形	接続
動詞型								
形容詞型								
形容動詞型								
特殊型								
無い語形変化のもの								

（第五表）助動詞接続表

用言に	未然形	連用形	終止形	連体形	語幹
	動詞	動詞	動詞	動詞	動詞
	形容詞	形容詞	形容詞	形容詞	形容詞
	形容動詞	形容動詞	形容動詞	形容動詞	形容動詞
用言以外に	体言、または助詞ノに				

（第六表）助詞接続表

	第一類	第二類	第三類	第四類
体言に				
用言に 連用形				
用言に 終止形				
用言に 連体形				
用言に 仮定形				

K200.8-2-16

中等文法
口語

昭和二十二年三月三十一日印刷　同日飜刻印刷
昭和二十二年四月　四　日発行　同日飜刻発行
〔昭和二十二年四月　四　日　文部省検査済〕

著作権所有

著作兼発行者　文部省

東京都千代田区神田岩本町三番地
飜刻発行者　中等學校教科書株式會社
代表者　阿部眞之助

東京都千代田区神田神保町三丁目三十九番地
印刷者　明和印刷株式會社
代表者　發田榮藏

APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION
(DATE Mar. 31, 1947)

発行所　中等學校教科書株式會社